

令和8年度第1回京都市スポーツの絆が生きるまち推進会議 摘録

日時：令和8年6月29日（月）午後1時30分～午後3時50分

会場：分庁舎第4・5会議室

出席：

【委員】松永委員長、長積委員長代理、碓委員、上田委員、武田委員、田中委員、春田委員、松崎委員、松村委員、三宅委員、森田委員、安嶋委員

【事務局】萩原スポーツ担当局長、平井市民スポーツ振興室長、荒木京都マラソン・ワールドマスタースゲームズ担当部長、三谷スポーツ担当参事、水谷スポーツ企画課長、中村スポーツ施設課長、村松公民連携型整備推進担当課長、丸山スポーツ活動推進課長、加島京都マラソン推進課長、小川ワールドマスタースゲームズ企画担当課長、山本担当係長

【関係局】保健福祉局健康長寿のまち・推進室 木下健康長寿企画課長

保健福祉局障害保健福祉推進室 遠藤企画・社会参加推進課長

子ども若者はぐくみ局子ども若者未来部 吉田青少年・若者・まなび担当課長

1 開会

2 委員紹介、委員長挨拶

3 議事

（1）【議事1】京都市市民スポーツ振興計画の取組状況について

○説明資料：資料2、資料3、資料4（事務局）

（松永委員長）

- ・ 資料4について、説明のとおり、国と府と市は、調査項目が似ているが異なるため単純比較はできない。京都市は、「日常生活に組み入れた運動」という、身体を動かすことを意識して日常の作業を行うことも、運動・スポーツとカウントしているため少し数値が高くなっていると思われる。

（松崎委員）

- ・ 資料2の「するスポーツ」と「ハードウェア」の項目で、「施設の効果的な設備・運営」となっているが、市民としては、気軽に運動できる環境が増えてほしいとの思いがあるため、「既存施設の補修」か「施設の新設」かを明記する方が分かりやすいと思う。
- ・ 資料4のアンケート調査について、回答数が低いのであれば、対象者数を増やすことも含めて考えてもよいのではないか対象3,000人は少ないと感じるためもう少し増やすほうが良いと思う。

（事務局）

- ・ 資料2の施設に関する記載については、「ハード整備」という観点での取りまとめのためわかりづらい点もあるが、現行計画期間中に新設した施設として、直近では令和7年4月に新たなスポーツニーズへの対応として宝が池公園運動施設にアーバンスポーツパークを設置した。また、本計画期間中の取組にはなるが、同じく宝が池公園に体育館を新設している。その他、今年4月1日、南区にあるスケートボードができる火打形公園が建設局から文化市民局に所管替えし、テコ入れするといった事例もある。既存施設の改修という点では、常時必要な箇所の整備を進めており、これも計画期間中の取組ではあるが、たけびしスタジアムやわかさスタジアムの電光掲示板の整備を行った。また、宝

が池公園や下鳥羽公園の人工芝の張替えなどでは、外部からの資金を活用しながら、着実に工事施工を進めている。

- ・ アンケート方法について、京都市が市民アンケートを実施するときは、3,000 人無作為抽出を標準としている。本計画の調査でもこれまで 3,000 人としており、継続性の観点から、一旦はこの数としているが、ご意見も踏まえ取扱いを検討していく。

(長積委員長代理)

- ・ 基本的には、人口規模が 100 万人規模の都市であれば、大体 3,000 人無作為抽出で適切にサンプリングできるというのが統計学的には考えられている。誤差を少なくして代表値を抽出するためには、母数を増やすことよりも、次回以降、回収率を上げることへの工夫が必要。

(2)【議事 2】次期京都市市民スポーツ振興計画策定に向けた調査結果について

○説明資料：資料 5、資料 6 (事務局)

(碓委員)

- ・ 資料 5 の市民調査結果では、スポーツ実施率が「週 1 回以上 67.2%」「全くされていない 14.2%」と読めるが、残り約 20%はどういう方たちか。この 20%の方に対して、今後どうしていくかが大事ではないかと思った。

(事務局)

- ・ 資料に詳細を記載していないが、「週 1 回以上」と「全くしなかった」以外では、「月 1 ～ 3 日が 10.2%」「3 箇月に 1 ～ 2 日が 2.8%」「年に 1 ～ 3 日が 2.7%」で、「無回答が 2.8%」となっている。

(松永委員長)

- ・ 資料 6 に関して、参考だが、国の次期スポーツ基本計画策定に向けては、妊産婦が産前産後に体を動かすことへのサポートが弱いというところに着目し、母親の産後から育児期のスポーツ離れが、子どもの運動・スポーツ実施の二極化に大きく影響しているとして議論されている。

(3)【議事 3】次期京都市市民スポーツ振興計画について

○説明資料：資料 7、資料 8、資料 9 (事務局)

(松永委員長)

- ・ 資料 7 について、特に、パブリックコメントの時期と、会議が年 4 回と限られていることを意識いただけたらと思う。
- ・ 現行計画は 2011 年度から開始し、京都マラソンが 2012 年 3 月に第 1 回目を開催したため、当時は、京都マラソンが「する・みる・支える」に大きな効果を及ぼしたと記憶している。その後、策定から 10 年後の計画見直しのタイミングでコロナ禍となり、新計画策定は見送り、現行計画の追補版を作成するという最低限の対応となった。今回は全面的な改定であり多くのご意見をいただきたい。資料 9 の 3 ページ、「する・みる・支える」に加えて「集う」、真ん中に「つながる」という図がある。現在の事務局案を図示してもらったが、表現が難しい。皆様からそれぞれの幅広い視点でご指摘いただきたい。

(三宅委員)

- ・ 今回の検討案の中に、レクリエーションスポーツが追加されたことは大変ありがたい。実際に非常にニーズが高まっており、ニュースポーツやレクリエーション活動を提供して欲しいとの依頼が

寄せられるが、協会も担い手不足に直面しており、ボランティアの確保が課題となっている。そういう意味では、多様な活動を、多様な世代の人で作り上げていくことがこれから必要と考えており、必ずしもレクリエーションスポーツだけではなく、障害を持っている人も含めて一緒に活動するなど、レクリエーション協会という団体単体で取り組むのではなく、団体間の横の繋がりを打ち出していけるような計画になればと思う。

- ・ 次期計画でも、する・みる・支えるなどの具体的な目標値は設定していくのか。京都マラソンだけではなく、多様なイベントがあるため、そういうイベントへの参加によるスポーツ実施率も含めて目標値を設定できたらと思う。

(松永委員長)

- ・ 国においても、今回初めてレクリエーションスポーツを次期基本計画で打ち出そうとしている。スポーツ基本法が制定以来 50 年ぶりに全部改正された際に「スポーツ・レクリエーション」という文言が初めて条文に入ったが、そこからもう一段、レクリエーションの親しみやすさをつなげたものとして「レクリエーションスポーツ」という文言を新たに設け、基本計画に入れるということになっている。現状、レクリエーションスポーツをするには、それを支える繋がりがないとできない。そういう状況をどうしていくべきか、次期計画の中で具現化していかなければならないという指摘であった。

(森田委員)

- ・ まずスポーツ・運動の捉え方について、競技スポーツだけに限定的にしていない点に賛同する。資料 9 の 3 ページの図のとおり、「する・みる・支える」は繋がらないといけませんが、繋がるためには人が必要である。パラスポーツだけが取り出されるのではなく、それぞれの競技を障害のある人も一緒にやるんだという考え方はこれからも大切にしていく必要がある。障害のある人の中には、スポーツ・運動をしようと思うと、まずは人に連れて行ってもらわないとできないという人がたくさんいるため、それを支える人や繋がってこうとする人が必要。こういった繋がりを大切にしないと、京都市民のスポーツ実施率は増加していかないと思う。
- ・ 障害者スポーツの団体は、資金と人手不足が問題。また、市の組織も、縦割りではなく、横の繋がりが重要だと思う。競技も素晴らしいけれど、スポーツは誰がやっても楽しいものであり、スポーツの価値を高めていきたい。

(松永先生)

- ・ 京都市の現行計画では、ダイバーシティに関する部分が弱い。例えば、京都マラソンのボランティアは毎年 7,000 人ほど集まるが、車いす駅伝では圧倒的に足りていないという話があった。京都マラソンのボランティアの中には、「マラソンに限らず京都のボランティアであれば何でもする。」という方々が一定数いることが調査で分かっているが、部局を超えた横の繋がりがなく、京都市がボランティアに関して組織化できていないことは課題のひとつである。

(安嶋委員)

- ・ スポーツ推進委員は体育振興会連合会と両輪で動いてる。運動習慣については、「週 2 回以上、1 回 30 分以上、1 年以上（厚労省）」とされていて、スポーツ庁のスポーツ実施率は「週 1 回以上」とされている。スポーツ推進委員として、運動するということの数値の取り方が異なることと、京都市のスポーツ振興計画では「週 1 回以上」の数値を基準として、それを達成したとしていることをどう捉えるべきか疑問に感じている。

- ・ 推進委員は、委員数、特に若手が年々減っており、支える人数が非常に減っているうえ、高齢化している。このような状況で、どのように支えていけば良いのかということがわからない。

(松永委員長)

- ・ 京都市のスポーツ振興計画の上位にあたる、国の計画を所管しているスポーツ庁も「週1回」の実施率を目標として掲げており、京都市ではこれに準拠した目標設定を行っている。これについては強度や時間という質の問題もあるという前提のもと、わかりやすいところで「最低週1回」と、設定しているとご理解いただければと思う。

(事務局)

- ・ 目標設定に関しては、委員長のご説明のとおり、国の基準・目標に準拠して設定している。質の部分に関しては、京都市の場合は軽く体を動かすことも含めて広く解釈しているため、運動の強度があるものができているかという点は検証が必要であり、どの部分に重きを置くのかということも含めてこれから考えていきたい。

(松永委員長)

- ・ 京都市でこれまで土台を作ってきた体育振興会とスポーツ推進委員の役割は理解されていることだと思うが、担い手不足は各団体の共通する課題になっており、この状況をどう解消していくのかという点は、「集う」・「つながる」というキーワードを考える上で重要な指摘だと思う。

(松村委員)

- ・ 体育振興会では、学区ごとに区民体育祭を行っているが、自治会や町内会離れが進んでいる。京都市全体で見ても、活動への参加者が減少していることに加え、各行政区の人口差もあり、従来からの条件では各種大会に参加できるチームも減少しており、競技性を突き詰めるのではなく、ボーダーレスな大会として開催するなどの取組を進めようとしているところである。また、体育振興会は地域活性化を目的としているが、地域の方から防災の視点を求められることも多く、区民体育祭を防災訓練の一環とするなど、地域とのつながりを作り、共助の役割を持てるような団体になるように取り組んでいる。

(田中委員)

- ・ スポーツ少年団の現状として、子どもの怪我がとても多く、体力も低下している。参考資料5の令和7年の児童の体力テストの結果は、令和2・3年のコロナ禍に3~5歳だった子どもたちの数値であり、コロナ禍で身体を動かさなかった子どもの体力が落ちるのは当然だと思う。一例だが、ラグビーをする際にヘッドキャップをする子どもが増えている。これは首の筋力が弱く、頭が振られて脳しんとうになりやすい子どもが増えているためであり、まずは子どもたちの体づくりを進めることが必要であり、大切なことと考えている。また、京都市武道センターで、「はだしで遊ぼう子ども運動教室」というものを実施している。今の子どもは、学校ではだしになることを禁じられているため、はだしになることや一本下駄という特殊なゲタを履くことで、様々なことが見つけれないかと模索している。子どもが参加し、そこで興味を持った保護者の方も一緒に四股を踏み出したりする。子どもと一緒に活動することがきっかけで、親もスポーツをすることが増えていけばと思っている。今後、スポーツ少年団と総合型地域スポーツクラブと一緒にイベントを実施する予定があり、京都市スポーツ協会主催のスポーツフェスタもスポーツ少年団として出場の声掛けをいただいた。
- ・ 情報格差の解消という点では、京都市全体でハッシュタグを作れるような何か新しい言葉を作って広く発信すれば、京都市のスポーツ情報が検索しやすくなると思う。

(松永委員長)

- ・ 安全に身体を動かすという視点の話も出たが、コロナ禍で外で遊べない、猛暑で外や公園で遊べないといった状況が続いており、今の子どもたちは、おそらく皆さんが想像する以上に、競技の実施率が下がっている。競技スポーツの実施率に着目することやターゲットを絞っていくことは大事な視点だと思う。
- ・ 京都市独自のキーワードの検討も、これからの会議で進められたらと思う。

(春田委員)

- ・ 資料9の「する・みる・支える」に「集う」が追加されて本当に良かった。総合型はまさしくコミュニティの場を何よりも大事にしており、これがもっと広まっていったらいいなと思いつつ、まだ認知度が低いことが課題。京都市にはクラブが少なく、歴史も浅いが、実際は少しずつ増えてきている。担い手不足という話も出たが、20代、30代の若手の方々が新たにクラブを作ろうと動き出されている。まだまだこれからではあるが、ある地域では体育振興会で経験のある方々が助けてくださるという事例もあり、できるなら次期計画に「総合型クラブの設立」というような文言を入れて欲しいと思っている。総合型は勝利至上主義ではないと伝わっているように思うが、実際には全国大会に出場されているクラブもあり、勝つことを目的とはしていないが、成績を上げているクラブもあるということを知っていただきたい。「多種目、多志向、多世代」というのが総合型地域スポーツクラブであり、今後、部活動が地域展開されていくというこれからの時代に、「多種目、多志向、多世代」はまさに合っていると思っており、体育振興会など様々な団体と横の繋がりを持っている、今までなかった総合型クラブを作るときが来ている。

(松永委員長)

- ・ 現行計画の策定当時には、総合型地域スポーツクラブがほとんどないという時代であったが、現在は部活動地域展開もあり、重要な役割を担う存在であるため、次期計画でもキーワードとして必要であると考えます。

(武田委員)

- ・ スポーツに関するフェーズが変わったと感じており、次期計画のスポーツの範囲に身近な運動やレクリエーションスポーツを含めるという考えに賛同している。アーバンスポーツはコミュニケーションスポーツと言われており、プレー中の失敗に対して、「ドンマイ」のような慰めの声掛けではなく、「ナイスファイト」のような前向きな声掛けをしているなど、非常にコミュニケーションを大事にやっていると感じている。スポーツのこういった変化も、計画推進のカテゴリーのひとつとして使えるのではないかな。
- ・ もう1点、アンケート調査結果を見て、市民の方の意識の中で、スポーツをする理由が、楽しみよりも、体力の維持・向上が上になっているという点が衝撃であった。1人でできるウォーキングが非常に多く、「集う」という観点で、ひとりで運動している方とどのように繋がるよう働きかけるかが難しい課題である。市スポーツ協会でも、高齢者向けの健康教室などに取り組んでいるが、スポーツの分野だけでなく、健康長寿の施策とも連携し、柔軟なクラブ組織や繋がりづくりが必要ではないかと思った。防災訓練の話も出たが、スポーツの力を生かした新たな居場所づくり・出番づくりの概念も、次期計画に幅広く入れる必要があるのではないかなと思う。

(松永委員長)

- ・ 民間の高齢者施設でアーバンスポーツができる場所を作り、子どもが遊びに来るといった事例があ

った。以前から言っている図書館で身体を動かす仕組みづくり同様、なぜスポーツをしなければならないのかという人たちへのアプローチには、こちら側の概念を変える必要があると思う。

(上田委員)

- ・ 府でも事業の見直しをしている段階で、担い手の高齢化など同様の課題があり、府スポーツ協会と教育委員会とスポーツ振興課で連携して事業を回していこうという話が出ている。次期計画構成案では既存の団体と協力するような記載がないため、その視点もあると良いのではないかと。また、既存のイベントをブラッシュアップして見直していくことも良いのではないかと。手軽にできる運動をする人たちが多く、国際大会や代表大会に関する記載があるが、その中間層の人たち、例えば子育て世代が参加できるような取組、繋がる仕組みがあれば良いと思った。

(松崎委員)

- ・ 次期計画は期間を10年としているが、中間ポイントを明記し、市民に長過ぎると思われない工夫が必要。また、スポーツの良さを伝える仕掛け(動画、講演など)があってもいいのではないと思う。何故スポーツはいいのか?スポーツをすることの良さは、例えば、ウェルビーイングに繋がる。生きる力を養うことに繋がる。ルールの中でやる。勝ち負けが決まる。努力しても勝つとは限らない。などスポーツは人生そのものというような側面がある。スポーツの良さを伝えることは有効と思う。
- ・ 京都は、京キッズRUN、全国高校駅伝、全国女子都道府県駅伝、京都マラソンが開催されており、走ることが小さい頃から年配になって京都マラソンに参加するところまで繋がると、京都らしさが見出せると思うので、このような観点も加えてほしい。
- ・ スポーツをするための環境の少なさと施設使用料金の高さが京都の課題だと思う。学校施設の活用により、安全に走れる環境や安全にキャッチボールできるエリア、壁打ちできるエリアの環境づくりができないか。
- ・ 部活地域展開に併せて、複数のスポーツにチャレンジするマルチ化を進めるべきではないか。
- ・ 観光分野では市民限定のバス旅行割引や特別拝観といったサービスがあるように、市民限定で試合観戦ができるなど、市民が喜ぶような「見る」環境整備はできないか。
- ・ 京都マラソンのボランティア申込みのページが非常に分かりやすかった。団体・個人・個人団体という枠があり、誰かと一緒にやりたいという場合に個人団体の枠で申し込みが可能。この仕組みは、他のボランティアでも使えると思ったので、こういったノウハウを提供すれば、他の大会でもボランティアしやすくなるのではないかと。また、ボランティアをしたら地域ポイントがもらえるような仕掛けも面白いのではないかと。
- ・ 全体として、個別具体の競技名が出てこないで、例示でも競技名を記載するとスポーツをすることのイメージがしやすい。また、ボランティアそのものをスポーツ化するというのもあるのではないかと。

(碓委員)

- ・ 企業の事業活動の一環でどういったことができるかという、どうしても資金援助の部分が大きく、その域を超えられないという課題はある。例えば、スポーツ施設の改修が必要な場合に、地域の商店に協力いただき、「この公園は、この地域の何々商店さんの公園」とするといった、大企業だけではない企業との連携による運動、スポーツをする場の改善ができる余地はまだあるのではないかと。数値目標は数値にこだわりすぎる必要はないと思うが、例えば、「する」では、どういった層をタ

ーゲットにして増やしていくのかを明確にした方が、具体性が上がると思う。「みる」に関しても、配信で見ている方をリアルで見させるのは容易ではなく、アンケート調査結果から、配信で見られることが7割を超えているという状況で、リアルの数値を引き上げようとするのが現実的なのかという点は疑問。目標値を置くのは良いが、書かれた施策がその課題と合っているのかという点は精査すべき。「支える」についても、自分が好きで応援しているという意識でなければ続かない。推し活ではないが、自分ごとにする意識付けが必要と思う。

(長積委員長代理)

- 全体の構成として、5で新京都戦略の記載があり、そこに掲げられている①人づくり②健康づくり③地域づくりを7で基本的な考え方としているが、そうすると、6がどのようにつながり、どのように踏まえているのかが分からない。また、7の基本的な考え方に基づいて、8の計画目標があるべきかと思う。基本的な考え方に基づいて計画目標を設定し、そのための戦略として「する・みる・支える・集う・つながる」がどのように関わっていくのかを記載した方がわかりやすい。
- 次の10年の計画ということであり、この計画が、少なからず都市経営の中心に位置づくようにできないか、健康やウェルビーイングは誰もが失いたくないものであり、その幸せを生み出すような政策を記載できないかと思った。「する・みる・支える」については、数値という量的な達成よりもその質的な達成が問われることになるため、計画目標は、どのように実現されていくのかを見据えて設定すべき。また、予算は新しい視点についてくるものと思うため、「集う・つながる」ということが、どのように都市経営のハブになっていくのかを示していくべき。京都らしさという点では、「つながるの先」に、もう少し未来志向、京都の未来をデザインする、といったメッセージを載せられないかと思う。つながるだけではなく、つながった後に何を生み出し、創造していき、それをどう活かしていくのかということが語られる方が、京都の基本構想から先を見据えた計画にできるのではないかと思う。どう仕組みを作り、市民の自立的な活動をどう促進していくのかをつなぐの先のところで表現されるような記載にしてほしい。

(松永委員長)

- 京都基本構想や新京都戦略では、スポーツというワードが1回ずつしか出てこないが、これは裏返せば、スポーツの計画策定の自由度が高いということでもある。本日の会議では、支える・集う・つながる・担い手不足などは何度もキーワードとして出てきた。スポーツ以外にも、京都市全体の政策、施策、事業の中で、これらのワードが出てくるところを整理し、これまでの計画に囚われすぎず、京都らしさを見つけていけたらと思う。

3 閉会

以上